

第3回秋田市総合計画・地方創生懇話会

地域資源活用・魅力向上分科会 会議録

日時 令和2年11月16日（月）14時～15時15分

会場 秋田キャッスルホテル（4階 千秋の間）

出席者

地域資源活用・魅力向上分科会委員（6名中6名出席）

小国輝也委員（分科会長）、水野勇氣委員、小杉栄次郎委員、深澤功委員、境田未希委員、赤石昌之委員

市側

企画財政部長、観光文化スポーツ部次長、企画調整課長

分科会長	<p>本分科会は地域資源活用・魅力向上分科会であるが、必要な場合は人口ビジョン、将来都市像、関連のある他の戦略についても意見交換を行っていきたい。</p> <p>必ずしも分科会として統一した結論を出す必要はないため、分科会で出た意見を全体会で報告する。忌憚のない意見を頂戴したい。</p> <p>まずは、総合計画と人口ビジョンの原案についての意見を伺い、その後、具体的な取組や提案等を伺う時間とする。</p>
委員	<p>全体のことで1点確認したい。コロナ禍で秋田市がどうするかを踏まえて作成している点では、時代に鑑みた計画だと思うが、今後の見通しが立たない不確定な要素が多い。基本構想の中で、「見直しを行う」という記載があるが、どういったチャンネルで、またはどういった状況でやるのか。</p>
事務局	<p>総合計画は計画期間を5年としているため、5年間の切れ目ない計画の策定を前提としている。庁内でコロナの影響調査を行うために、計画策定スケジュールを3か月後ろ倒したところであるが、各分野で影響があったと考えている。特に、本日説明した現状と課題にあるように、産業、観光、文化といった分野においては、コロナに関する記載が多くある。</p> <p>5つの将来都市像は、コロナの影響があってもやらなければならないことを記載している。そうした中で、今申し上げた分野は、コロナの影響でどうしてもスタート地点が変わってしまったため、そうした点を今回の案で</p>

見直した。

また、創生戦略は、将来都市像で見直した考え方をもとに、将来都市像に横串を通すイメージで併せて見直しをしている。

委員 コロナにより、今後の状況が劇的に変わってしまう場合、つまり、前提が変わるといふことだと思ふが、そうなった場合の見直しは1年毎に行うのか、あるいは随時行うのか。

事務局 基本構想は議決して今後5年間取り組むものである。この下に毎年度更新し、具体的な事業を記載する推進計画があるので、そちらに取り込んでいきたい。

分科会長 ここで議論するのは、主に来年の春からスタートする5か年計画の基本構想ということだが、期間の前半はコロナの影響を加味しているということだと思ふが、5年後の目指すべきところも意識し、コロナが収まった際のこととも考えるということによいのか。

事務局 基本的にはそういうことである。先ほど申し上げたように、産業、観光、文化はコロナの影響でスタート地点が落ちたという捉え方をしているので、これらの分野については課題を整理した。

委員 人口ビジョンの説明を聞き、想定よりも悪くなっていなかったことについては、良い結果であった。その中で、今まで「成長」という言葉を使ってきたものを、「創生」という言葉に変えた市の舵取りを評価したい。

人口の推移が想定より悪くないため、ある程度これまでの流れの中で舵をきれる。大手術をしなくても様々なことができると感じた。

そうした中で、何かを変えないといけない場合、どうするかということを見ると、1960年～1970年と続いてきたこれまでの成長戦略のやり方をどう変えるのかということだと思ふ。近代化する時の重建設主義というか重工業主義というか、建物を次々に建て替えて行くようなまちではなく、「いかに効果的にまちをつくるか」という視点がすごく重要になる。

例えば、最近ではサッカースタジアム建設の話がよく話題になる。今までは、土地が余っているから空いている場所に新しいものを造っていく成長の仕方をしてきたが、こうしたやり方では上手くいかないのは明らかだ。まちがスクロールしていく中で空洞化が起きている状況をどうするのかを考えると、土地が余っているからという視点ではなく、まちをどのように変えていくのかという視点が重要である。

サッカースタジアムは、スポーツを行う場であるが、興行の場所でもある

と思う。そうした視点からすると、まちづくりとかなり綿密に考えていかなければならない面がある。現在の議論をみていると、スタジアムに行く人を臨時バスで運べば良いという話があるが、公共交通や日常の交通とどう結びつけるかを考えて、それを基点にまちをどう蘇らせるかという視点が必要である。

公共的な施設の建築や場所作りを行う際は、新築至上主義ではなく、今あるまちの資源、人の分布をどのように活用していくかという視点でやってもらいたい。昔夢みた、「自動運転で自由に動ける」という時代がくるかもしれないが、都市の効率化を考えると、一番輸送能力が高い駅や電車などについてしっかりと考えつつ、今ある施設をどのように活かすのかが重要である。

分科会長 今ある資源をいかに使うかという提言をいただいたものと思う。

委員 例えば、土崎は人口が多いし、面白い人がいっぱいいると思うが、商業的にはなかなか厳しいという話をよく聞く。秋田市では、コンパクトシティとして7つのエリアを掲げているが、7つそれぞれの特徴を活かすようなまちづくりが重要である。

分科会長 商工会議所でもまちづくりを推進している。特に、芸術文化に関しては、秋田駅を中心に千秋公園までのエリアにおいて、来春、文化創造館がオープンするため、建物の整備は進んできたと思う。今まで分散していたものをいかに「ゾーン」として活用するかという中で、これまではソフト事業をとりまとめるディレクターが不在で、県、市、商工会議所などが別々に様々なことをやるため、残念ながら「なかいち」のようにイベントをやらないと人が集まらないという結果となっている。折角、駅を中心に芸術文化ゾーンとして取り組むので、とりまとめを行うディレクターの視点が必要である。

委員 「日常」の視点も大切であり、新しい開発を進めていくと、これまでのコミュニティなどが解体されて、一からやり直さなければならないことが往々にしてあると思う。秋田の人をみていると、一見大人しそうにみえて、竿燈まつりや土崎の祭りでもそうだが、ものすごく団結する。そうした熱い気質もある土地柄だとすると、今あるコミュニティをいかに繋いでいくか、という視点が必要で、新しいところでゼロからスタートするのは勿体ない。

委員 創生戦略1の重点プログラムIに、「地域の強みをいかした産業の育成・創出」とあるが、地域の強みをどう捉えているのか読み取れない。

資料1のP7に、秋田市に住み続けるために必要なこととして、「雇用の場の確保」が最も多いとある。これが、今求められていることであり、コロナの影響で今後の経済状況は悪くなると思うので、更に求められるだろう。

そうした中で、秋田市がどのように産業の育成・創出を行っていくのか、地域の強みとは何なのかをもう少し示さないと、議論ができない。個人的には、今秋田市にある国際教養大学、秋田大学、公立美術大学、県立大学など、全国的にも強みのある学部を持つ大学を活かした連携が、結果として戦略2の芸術文化にも繋がると思う。もう少し、産学連携を要素として考えていただきたい。

分科会長 地域の強みをどう活かすかという中で、例えば大学が集中しているという強みを活かした産学連携を推進いくことも一つだろう。

委員 菅首相は、中小企業の再編を強く打ち出しており、政策としてもそれに関連したものが出てくると思う。そこに対して、秋田市として物事をどう予め考え、首相の方針に乗るのか否か。政府の方針は明確化しているので、その方針と地域の強みをどう活かすのか。後継者のいない会社がかかなり増えている中では、M&Aなども今後の5年間で必要ではないか。

委員 資料1のP31は、観光は外に向けて、まちのにぎわいは内に向けての内容となっている。それらをどう回していくのかという視点で、関係人口の創出がキーワードになるということが書かれているものと捉えている。県外の人を如何に巻き込んでいくのか、ということが必要になると思うので、具体的な施策を強めていくことが一番重要である。

委員 関係人口の創出と移住促進の関係性をどのように整理するか考えている。東京支社に勤務した際に、秋田県人会や高校の同窓会などとの付き合いがあったが、その人たちは、都市で培った技術や知識を動員して欲しいと求められているのか、地元に戻ってくることを求められているのかどっちつかずにいる。

首都圏に住んでいる出身者は知識、知恵、経験を役立てるのはやぶさかではない。地元との調整をうまくやれば、関係人口の創出は上手くいくだろう。都市の人が考える、「ふるさとはこうあるべきだ」というべき論と、秋田で様々なしがらみの中で何十年も住んでいる人とのギャップは存在し続けると思う。こうしたギャップを調整する能力と経験のある仲介役を多数つくることが重要である。

委員 基本構想の総論については、概ね良いと考えている。当分科会に直接関係

する部分では、駅前の雰囲気が良くなってきており、それに伴って今後変わってくる要素も多くあると思う。不動産業を営んでいるが、現在は駅前の物件がない状況であり、流れが良いと感じている。こうした流れの中で、サッカースタジアムの建設などで駅前からの人口流出がみられるようなことになれば、コンパクトシティの概念が崩れる。このため、慎重な議論が必要になると強く感じる。コロナ対策などが必要な中で、スタジアムがどの程度必要とされるのか、という現実的な議論も必要だろう。

移住に関しては、4年程前から県や市と移住促進のイベントを行っており、東京にも足を運んでいるが、コロナ禍においてチャンスがあると思っている。秋田市に戻って来たい人や、戻って来た人に対して、起業のための補助金等を交付するといったことだけでなく、人との繋がりを持たせることが出来れば、移住者が移住予備軍の人を呼び込むことができると思う。

将来都市像の施策において、農林水産ビジネスという言葉のアグリビジネスに変更しているが、どういったことをやるのか具体的な狙いがあれば教えていただきたい。また、関係人口の創出についても具体的な取組があれば教えていただきたい。

事務局

アグリビジネスについては、部局から詳細を聞いていないため、分かる範囲でお答えする。資料1のP64にアグリビジネスの用語解説がある。今までは、6次産業化を中心に取り組んできたが、加工や流通など幅広い分野を対象とすることを念頭に置いたものである。来年度の推進計画を策定した際に、より具体的なものを示せるだろう。

関係人口に関することでは、本構想には記載していないが、人口減少・移住定住対策課においてシティプロモーション基本方針を策定中である。シティプロモーションは、シビックプライドと併せて、市民一人ひとりが地元の地域資源にいかにかたりや愛着を持つということが重要になる。委員が言ったように、補助金を出すだけでなく、ネットワークをつくれる人が地元にいるという点が、関係人口から移住に繋げるというヒントになるのではないかと思った。

分科会長

人口ビジョンのP43にあるように、社人研では2045年の人口を22万5千人と推計しているが、これは私が幼少の頃の人口と同規模である。秋田市が人口22~23万人で維持できたとしても、県の人口は同時期に60万人を下回る状況になるだろう。そうした状況になると、若い人が少なく高齢者が増えるという人口構成の変化だけでなく、人数そのものの減少によって、勢いがなくなるだろう。こうした中で、取組の基本的視点にあるとおり、若い世代の結婚・出産・子育ての希望を叶えたり、安定的で魅力的な仕事場をつくるということは、全国の自治体が行っている。ここに「秋田らしさ」を、

地域の強みをどのように発揮していくのかということが必要であり、今の段階で考えていることがあれば教えていただきたい。

事務局

人口に関しては、5年前の社人研推計より上向きではあるが、厳しい状況に変わらない。人口減少対策の基本的な方向や具体的な施策をまとめる総合戦略は、総合計画から必要な部分を抜き出す形となるため、基本構想の将来都市像や創生戦略に対して、若者が魅力を感じるまちをどうつくるのかという意見を皆様からいただき、人口減少対策に併せて反映していく。新しい時代に、多様な若い人材をどのように活躍させるのかといことになるが、全体会で触れたデジタル化や公共交通で自律した生活ができるまちという視点を、今回の計画では強めに打ち出していきたい。

委員

「秋田らしさ」をどう打ち出したら良いかという話を良く聞く。ここ数年で、「こういうことかな」と思ったことは、今ある秋田らしさは、先人が作り上げた生活の積み重ねからできているものだという事である。秋田犬や竿燈は、もちろん大切なものなので、アピールするのは良いが、いかに新しいものをつくっていくかということだと思ふ。そうした視点からすると、大学で行っている研究は、まだ形にはなっていないものの、これからのことを考えながら一生懸命様々な分野で模索しているということである。

美大は、市が設置者なので、秋田市と様々な連携を図っているが、市内にある他大学の学生や先生達とも、産学官連携で何か新しいものをつくっていければ良い。人口減少の中で、「ここに住みたい」というまちにするには、そういった夢がないと辛くなるので、そうした視点を発信してほしい。

農林水産業の振興という視点では、秋田市は森林環境税の割り当てが多いはずであるが、山から木が運び出されていないようにみえて勿体ない。森林環境税は、山を整備すると同時に、山から木を運び出すことが基本理念だが、どうしても運び出さずに山で溜め込むことが多いらしい。今の市の施策ではあまりわからないが、製材工場などの川下に対して、どのように木を出すのか、といったことがみえてくると良い。

秋田県は森林県で、木材を加工する製材所、家具屋、大工などのレベルが他県より高いという強みがあるが、この2～3年で優良な製材所が廃業している。他市でそういう人がいれば、秋田市に連れてくるといったことをしないと、5年で危機的な状況になる。こういう場で発言することが正しいのか分からないが、議事録が残る場所で申し上げておきたい。秋田市にある大きな製材会社はうまくいっているが、小回りのきく会社を残していくことが秋田の文化を残すことにも繋がるのではないかと。

環境関連の産業の育成に関して、秋田県は資源が豊富で環境意識も高い中で、パッシブエネルギーについての施策も多いが、「環境」と言うと、景

観などのことを忘れやすい。環境のために環境を壊すということになりやすいので、市の中で横の繋がりを強めて施策を行っていただきたい。

分科会長 他に観光、文化、スポーツなどに関することで具体的な意見はあるか。

委員 文化創造館がオープンすることで、まちのにぎわいが十分戻ってくる事が考えられる。そのこと自体は良いと思うが、今後はソフト面が重要になるだろう。

「秋田らしさ」という肝心な部分について、審議会のような場を通じて決定していくものなのか。必要ならば、この分科会で議論を深め、後に審議会のような場に移すなどしないと、一番大切な部分が抜けてしまうのではないか。

先ほど話のあったプロジェクトマネージャーのような方が絵を描くところまでは良いが、具体論になるとぼやけてとりとめのない方向に向かってしまう。具体的どころがしっかり創られることによって、まちの理想と現実が結びついていくと思う。

事務局 ディレクターやプロジェクトマネージャーのような役割は必要だと思うが、まちづくりというガバナンスは市がしっかりと持たなければならない。そのガバナンスを理解した方々がまとめ役として動くのが理想であり、一人がまちを切り盛りするというのではないと考えている。そういう意味では、総合計画の作成を進める中で、中心市街地の活性化というまちづくりを理解していただきながら、その考えが広まった段階で実現できるスタッフを揃えられればと考えている。現在、商工会議所に事務局を担っていただいている、芸術文化ゾーンの活用研究会がその入り口だと思っている。一人に任せるのではなく、「皆が当事者として意見を出し合う」ということを続けていければと考えている。

「秋田らしさ」については、生活の積み重ねの上で、10個でも20個でも秋田に対する思いや良さが積み上がった際に、総合的な秋田らしさが生まれてくるのではないかと期待をしており、決して一つではないと考えている。皆様の意見を積み上げていければと考えている。

分科会長 スポーツの面で話をすると、ハピネッツ、ブラウブリッツ、ノーザンブレッツが誕生し、スポーツで秋田が活性化したことは間違いない。単にチームの動員力ということだけでなく、チームがあることで秋田に誇りを持ったとか、秋田に帰ってきたとか、県外の人から秋田が盛り上がっていて羨ましいと言われたりとか、そういった話が多く聞かれるようになった。そういった状況からすると、スポーツツーリズムが秋田に与えた影響は相当大きい

と思う。

先日、Bリーグのチェアマンが秋田を訪れ、ハピネッツは集客力とグッズ販売などは問題無いが、アリーナが問題だと話をしていた。しかし、一般の市民からすれば、ハピネッツのアリーナ、ブラウブリッツのスタジアムを建設する費用はどこから出るとのことであり、そうした問題を解決しながらうまくやって行くことは本当に難しい。しかし、こういったことこそがまちづくりであり、整合性を図りながら、秋田に来る人が喜んで元気になるようなことを投げかけてみたいが、いかがなものか。

委員 アリーナやスタジアムはどう活かすのか。活かすだけの投資価値があるのかということが問われている。アリーナは、現状のBリーグの規定であれば、プロバスケットボールの試合は年間30試合しかない中で、こういった用途をめざすのか。それ以外の日にこういった活用をするのか。

例えば、卓球、バトミントン、女子バスケットチームなどの活用だけでなく、ライブを行ったり、コンベンション機能を持たせての複合的な活用を考えた上で、何処につくるべきなのか、どういうまちにしたいのか、ということが重要で、この点はスタジアムも一緒である。

基本構想の中に、「芸術文化の香り高いまちづくり」という言葉があるが、とても難しいと思う。文化はまちに根付いていないと、文化とは言えない。先ほど述べた地域の強みの話と同じになるが、秋田の文化というと多くのことをイメージできるため、文化と言えば「これ」というのは難しい。

「芸術文化」は観光資源に十分なり得ると思うが、市民の視点と観光客の視点に分けるのではなく、観光客に対してアプローチできて市民も楽しめる取組が、結果として「人が集まる場所」に繋がるのではないか。

少子高齢化が進む中であって、高齢者が働く、または働きやすいといった視点が計画に反映されていない。現在は、60歳で高齢者だという認識は誰も持っていないと思う。70歳～75歳まで働いてもらわないと経済が回らないため、この5年やもっと先を含めた視点が必要である。

委員 高齢者は秋田の宝の1つだと思っている。猫カフェではないが、孫カフェのようなものをつくり、高齢者がそこで働きながら孫の面倒をみるといったことを幼稚園や保育所、高齢者施設と一緒にやれると効率的だと思う。

秋田の人は、同じ目的を持った人とでないと踏み込んでいけない人が多いなかで目的が偏らないようにすること、また、誰のためにやるのかという視点がずれないようにしていただきたい。

委員 資料1のP31～32に記載されている取組の方向に「同感染症の影響により落ち込んだ観光需要の回復にいち早く取り組むため、国や地域ごとの感

染収束を見極めながら、「新しい生活様式」のもとでの観光客の受入れ体制の整備に努めます」といった記載があるが、より具体的な取組は推進計画に記載されるということで良いか。

事務局 具体的な手法は、国の方針などに従いながらやること、オンラインでやることなどがあると思うが、推進計画にそこまで具体的なことは記載しない。

委員 推進計画は議決の対象なのか。

事務局 推進計画は議決の対象ではない。基本構想を議決した上で、それに基づいて各部局が編成する予算を議決する。

委員 それぞれの地域のそれぞれの分野の人がそれぞれの秋田らしさを求めて様々な取組を行っている。秋田市の話ではないが、北は鉱山と森林（秋田杉）、南は農業共同体、その他に秋田犬や秋田美人というキーワードがあると思う。

様々な人が様々なことをやってきたと思うが、そうした取組は、まちづくりにどう活かすのかという目標などがはっきりみえないと「やりっぱなし」になる。やりっぱなしにならないようにシステムティックに組み合わせないと秋田の将来に繋がらないだろう。

分科会長 竿燈まつりが中止になったことは残念だが、10月以降、市を中心に様々なイベントが開催されたことで、竿燈を上げることもできた。竿燈を上げている人はもちろん、見ている人も喜んでいた。

観光面では、コロナによって団体客はあまり来なくなったが、Go Toキャンペーンが始まって以降、少人数で訪れる人が増えている。これまで、秋田は「何もない」と言われてきたが、ねぶり流し館、セリオン、小泉潟公園、紅葉がきれいな仁別のダム公園など、秋田の人でも知らないような少人数で行っても「良かった」と思える場所が周辺にある。団体旅行の回復は当面難しいと思うが、お金と時間がある高齢者が少人数で旅行する動きがでてくる可能性があるので、都市観光の強化といった視点も盛り込んでいただきたい。

事務局 竿燈まつりについては、来年以降もコロナの状況をみながらの開催になると思うが、2年連続中止ということはないと考えている。また、少人数の旅行が増加してくる可能性は考えている。来春、大町にまちなか観光案内所がオープンするため、そういった施設も活用しながら取り組みたい。

|

以上